

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

北条政子と牧の方 — ジェンダーの視点から —

野 口 華 世

皆さん、こんにちは。今紹介いただきました野口華世と言います。「野口実先生とは同名中ですが、私の知る限り姻戚関係はありません」という話をしようと思っていたら、先にされてしまいました。野口実先生とは二十年以上のお付き合いがあつて、(京都女子大学近くの)新熊野、新日吉なども先生と一緒に歩いたことがあります。

もともと自己紹介をしようと思っていたのでさせてください。私は野口華世と言ひまして、東国、群馬県前橋市からやってきました。東国生まれ、東国育ちで、菅原孝標女のように上方に憧れ続けて、京都に来るたびにウキウキしてしまいますが、かといつて、東国から完全に出る勇氣もなく、今日も少し勇氣を出してやってきました。野口実先生ですが、曾我部(愛)さんや、今日いらしている関西の研究者たちとも、学会を通じて本当に仲よくさせてもらつていて、今日このような機会をいただき本当に感謝しています。

最初にお題をいただいたとき、これまで牧の方については書いたことがありますが、「北条政子」と聞いて、「え？

私ですか」という気持ちになりました。曾我部さんの報告にも女院がたくさん出てきましたが、私は普段「女の院」と書く「女院」の研究をしています。今日出てきますが、特に八条院と言う女性の研究をしています。八条院だけではありませんが、女院が大好きです。他分野の友達から、「華世さんは、女院さまの研究をしてるんだよね」と言ってもらえるぐらい女院の研究をしています。

今、「八条院」と言いましたら、「うんうん」とうなずいてくれた人がいました。八条院はどういう人かというところ、北条政子などよりも少し前、鳥羽院が死んだことをきっかけに保元の乱が起こりますが、その鳥羽院と、美福門院と言う女院との間の娘が八条院です〔系図1〕。

私は昨日京都にやってきましたが、新幹線を降りると八条口というJ-Rの出口があります。皆さんの中にも京都駅を使う人もいらっしゃると思いますが、八条口の中央案内所に、「京都駅 昔 むかし 八条院および八条第跡」と書いてある黒い看板があります。私は八条院という女院号にゆかりのある八条口にいつも出迎えられるので、うれしい気持ちで京都に來ています。

それなので、私は、研究として北条政子は「はじめまして」なので、「ちゃんと話せるかな」とときどきしています。昨日、ホテルで練習をしましたが、しどろもどろになってしまいました。今日もしどろもどろかもしれませんが、そこら辺は温かく見守ってください。

今回、関東と京都をつなぐような話をしようと思っていますが、曾我部さんのご著書を読むと、「関東との関係が大事だ」と書かれています。私は東国の人なのに京都の女院の話ばかりやっていたので、改めて今回は関東のことも勉強して、京都と関東は非常に関わりがあると思わされました。なので、このような方面の研究の可能性がまだまだたくさんあるということが今回示せるといいなと思っています。面白そうな話題があれば、皆さんもぜひ研

究をしてみてください。私は前談が長くなり過ぎるくらいがありますので、そろそろ始めます。

今日は、「はじめに」と「おわりに」があつて、「一・北条政子をジェンダーの視点から見ると尼將軍期の政子発給文書から―」、「二・牧の方―ネットワーク・政治・ジェンダー」です。牧の方の話のほうが多くて、主にネットワークと政治という二つのトピックについて見るので、政子と合わせて大まかに三つの話となっています。

私のパワーポイントも基本的にはレジュメを投影しています。どこへ行ったのかと思つた場合、パワーポイントとレジュメを見くらべると、わかると思います。

はじめに

「はじめに」です。「北条政子と牧の方」というお題は、昨年大河ドラマですね。久々に鎌倉時代の大河ドラマでした。「平清盛」なども挟みましたが、鎌倉時代で考えると二十一年に一度、その前は「北条時宗」というのがありました。戦国時代の大河ドラマは隔年ぐらいでやっているのです、あまり騒ぐこともないかもしれませんが、鎌倉時代の研究をしていると、「わー、大河が来た大河が来た」と色めき立ちました。いろいろな本が出たので、皆さんもお手に取られたかもしれません。

北条政子是有名なので、皆さんもいろんな著書で読んだかと思いますが、女性に関して書いているものであつても、大河が「鎌倉殿の13人」ということで男性に焦点が当たっていることもあつてか、基本的な女性には興味がないものが多いなと、思います。しかし、この時代の女性は、私にとっても勇気をくれるので、その人たちについて皆さんと一緒に勉強できればと思います。

では「二人の一般的なイメージとは？」というところにいきましょう。北条政子と牧の方ですが、曾我部さんも先ほどの報告で、「悪女」という言い方をしていました。これまでの大河の配役をレジメに挙げています。

今まで北条政子を演じたのは、岩下志麻さん、財前直見さん、杏さん、小池栄子さんで、杏さんは、「平清盛」のときに出てきました。一方、牧の方を演じたのは、大谷直子さん、田中美奈子さん、宮沢りえさんということで、何となく共通点は強い女と言えるでしょう。

強い女は、「悪女」と言われがちです。北条政子もそうですが、牧の方も、マクベスの夫人になぞらえて、「悪女」と言われたりもしています。前の報告でも、「レッテルを剥がそう」ということになりましたが、私の話もそれにちよつと近いものになります。つまり、「悪女」というレッテルを剥がそう、また「なぜ悪女と言われるのか。悪女とは？」というような話も最後に行いたいと思います。

一・北条政子をジェンダーの視点から見る―尼將軍期の政子発給文書から―

「二・北条政子をジェンダーの視点から見ると―尼將軍期の政子発給文書から―」に入っていきます。私が北条政子で一番面白いと思ったのは尼將軍期の政子の発給文書です。

大河ドラマの政子の最末期に注目すると、政子は尼姿で登場し、「尼將軍」とも言われていました。では、政子は將軍だったのか、というところから話を始めます。『吾妻鏡』巻頭の「関東將軍次第」を見てみましょう。

天皇家・摂関家の系図の次に、「関東將軍次第」として將軍の名前が並べられています。「。(源) 頼朝〈治二十年。五十三才。自治承四年。至于正治元年。正月十三日薨。〉。(源) 頼家〈治五年。二十三才。自正治元年。至建仁

三年。〕。(源) 実朝〔治十七年。二十八才。自建仁三年。至承久元年。〕、以上三代将軍。合わせて四十九年。〕、この次に出てくるのが「。平政子〔治八年。六十九才。自承久元年。至嘉禄元年。〕」、このように『吾妻鏡』でも政子は必ず「将軍」と出てきます。

『吾妻鏡』は皆さんもご承知かと思いますが、鎌倉幕府の正式な歴史書です。つまり、鎌倉後期の幕府や北条氏の認識では、政子が将軍だったということになります。

レジュメには、「・すべて将軍と同じだったか」と書きましたが、言葉足らずで、政子は、男性の将軍と待遇が同じだったのか、という話をします。このことについては、発給文書から見えていきます。二つの関東下知状を見ましょう。一つ目は元久二年（一二〇五年）二月二十二日（鎌倉遺文「一五一九号」）なので、実朝期の関東下知状、二つ目は承久二年（一二二〇年）十一月十七日（同二六七一号）なので、政子の将軍時代の関東下知状となっています。

注目してほしいのは文言の最後です。関東下知状というのは、執権が将軍の仰せを承って、御家人たちに命令するという文書です。実朝期のものは、『鎌倉殿の仰せにより下知くだんのごとし』とあります。それに対して、政子期のもは、「鎌倉殿」という文字がなく、『仰せにより下知くだんのごとし』となっています。これから見るに、政子に、「鎌倉殿」とは言えないということが分かります。微妙ですが、ジェンダー差があるのかなと思います。政子が発給した文書にどうして「鎌倉殿」がないのかということですが、今のところ、「朝廷から将軍に任命されたわけではないからということ、で、『鎌倉殿』とはさすがに言えなかったのではないか」と言われています。

もう一つ面白いのは、政子の発給文書です。最近、私が一緒に編著を出した田辺旬さんは、政子の発給文書についての研究をしています。その中に「仮名奉書」というのがあって、「和字御文」などとも言われます。

史料を（レジュメには）挙げていませんが、パワーポイントで見せると、建暦元年（一二二一）の「仮名奉書」（『鎌倉遺文』一九〇五号）は、政子が御家人に対して自らの意思を伝達するために発給した文書です。少し難しい言い方をすると、奉書形式ということで、関東下知状もそうですが、政子の仰せを承って、政子ではない誰かが出す文書と言うことができます。

奉書は、一般的に広く主人の意を受けて、従者が自らの名を著して出す文書です。中世は身分差があったので、身分の高い人から低い人に直接文書を出さないというルールがありました。政子は、最終的には二位にまでなったので、地位のある人から御家人に出す場合は奉書、そして、奉書を出す人を「奉者」と言いますが、奉者が仰せを承って出すのが基本的な在り方でした。

奉書の仰せの主体は、もちろん男性のこともありますが、その場合、奉書は漢字で書かれます。女性の場合にも漢字の奉書がありますが、このようにあえて仮名というのは、「特に幕府内では政子特有のもので、女院の令旨（りやうし）を手本にしたのではないか」と言われています。

この建暦の仮名奉書は政子が寺院に出した文書です。平仮名が交じっているのが見てお分かりになると思います。これらは全部、『鎌倉遺文』（東京堂出版）と言う本が典拠です。鎌倉時代の文書をたくさん集めた竹内理三さんと言う人が編集したこの『鎌倉遺文』にはとてもお世話になっています。

その中で、この仮名奉書は『鎌倉遺文』では「大江広元書状」と言われていますが、最後に、【あまこせんよりおほせくだされて候】とあります。「あまこせん（尼御前）」というのは北条政子のことです。ほかにも、【おほせこと候】とか【おほせことたまうべきと候】という書留文言を持つものがあって、政子の仰せを受けて大江広元が奉者として出しているものなのです。「仰せを受けて、奉者（広元）が出します」という意味の書留文言が見られます。

政子のこのような仮名奉書という形式はどこから来たのか。田辺さんは、八条院の令旨りやうじから来たのではないかという説をだしています。女院とか皇女、内親王などが奉書形式の文書を出す場合、「令旨」と呼ばれます。だから有名な「以仁王の令旨」も令旨と言われます。次にお見せしているこの文書（『鎌倉遺文』三〇七号）は先の奉書と同じように書留も平仮名で書かれていて、【おほせこと候なり】とありまして、これが八条院の令旨です。ここに八条院が出てきて、個人的にはちょっとうれしいなと思っていますが、政子の奉書はこの「八条院の令旨を手本にしたのではないか」と言われているのです。

このような仮名奉書は、政子をはじめ高貴な女性が自分の意思を伝える文書を発給するときのジェンダーと言えるのではないのでしょうか。文書を実際に発給する奉者が大江広元という男性だとしても、仮名で書かれているのが特徴です。政子の先例として女院がいたということではないか、ということなのです。

あとで、「2―（二）牧の方のネットワーク」の「②牧の方のネットワーク」でも見ますが、「牧の方にとって（ひいては政子にとって）八条院は比較的身近な存在だった可能性がありはしないか」と言っておきたいと思います。今、政子の奉書と女院の令旨とが似ていることが指摘されていて、これから研究をしなければいけません、そこら辺からも京都と関東がつながっていると言えるのだと思います。

さらに、政子の仮名文書が重要だったことは、北条泰時が制定した「御成敗式目」の中にも書いてあります。当時、鎌倉殿の仰せを奉じて北条氏が出した関東下知状よりも、政子の仮名奉書のほうが効力があると思われるのです。この辺は勉強してすぐく面白いと思った部分です。北条政子の文書の効力を見て、当時、まさに將軍として政子が頑張った姿が垣間見えます。政子は強い女で、政治にも口を出すというか、まさに政治の主体だったのです。さて、先ほど文書の先例としての女院という話をしましたが、その女院である八条院とさらに身近だったのは

ないかと考えられるのが次に紹介する牧の方だろうと思います。

二、牧の方―ネットワーク・政治・ジェンダー―

レジュメ二ページ、牧の方の話に入っていきます。牧の方については、三つの話、「(一)牧の方の出自とは?」、「(二)牧の方のネットワーク」、「(三)牧の方事件(牧氏の変など)―政治的関わりと矛盾―」までありますが、「(一)」と「(二)」は、牧の方のネットワークの話、「(三)」は牧の方事件の話ということで二つの話になっています。

なぜ牧の方の話が政子の話より長いかというと、北条政子は、皆さんもいろいろな本を手にして読むこともできますが、牧の方はまだそうでもない。一方で牧の方については近年の研究で新しいことがたくさん明らかになっています。私としては、鎌倉殿をめぐる女性の中で最も面白い人物だと思うのです。

牧の方については、群馬県の市民講座で話したこともあります。群馬県だとこんなにたくさんの方が来ないので、今もまだ緊張しています。受講者は、歴史の講座だといつも男性が多いですが、こういう話だと女性も多いですね。京都女子大学の講座がいつもという男女比なのかよく分かりませんが、当時の権力を持った女性に興味があるという方もいらっしゃるのではないかと思います。

まず、牧の方とはどういう人か確認していきます。牧の方は、北条時政の後妻です。前妻がいて、その次の妻、時政の正妻ですが後妻です。『愚管抄』(巻六)には、「若き妻」と出てきます。【時政ワカキ妻ヲ設ケテ】、そのあとに【ソレガ腹ニ子共設ケ、ムスメ多クモチタリケリ。コノ妻ハ大舍人允宗親ト云ケル者ノムスメ也】と書いてありますが、とにかく「時政は、若い妻(牧の方)と結婚した」わけです。

牧の方は、生没年は不明ですが、「北条政子より少し年下で、義時より少し年上ぐらい」という説があり、政子や義時と同世代だと考えることもできます。大河ドラマでは、義時や政子よりも年上の設定です。それだと、時政との年齢差が十五歳ぐらいです。十五歳ぐらいの年齢差の夫婦は今もたくさんいるので、「ワカキ妻」とわざわざ書くということは、私は、もっと年齢差があったのではないかなと思っています。

一二二四年、義時は六十二歳で、一二二五年、政子は六十八歳で死んでいます。そのあと、牧の方は一二二七年に夫時政の十三回忌を京都で行ったことが史料上分かっているので、少なくとも七十歳代までは生きていたと思います。

(一) 牧の方の出自とは？

次に牧の方の出自、系譜を見ていきます。どのような家の出身なのかということです。そもそも牧の方についてきちんとした研究が出たのは、たかだか三十年弱前の話です。牧の方を研究として最初に採り上げたのは杉橋隆夫さんです。最近それについての反論が出たりしていますが、基本的には杉橋説に沿って話していきます。

① 池禅尼の一族

杉橋さんは、まず牧の方が池禅尼の姪であることを明らかにしました。皆さん、池禅尼はどういう人か知っていますか。「よく知っています」という人が多い感じですかね。一般的にもまあ有名な人です。忘れてしまった人のために、少し補足します。【系図1】を見てください。

池禅尼（宗子）は、右のほうにいます。少し濃くして、波線を施しています。池禅尼は平忠盛の後妻で、やはり

は、系図オタクなところが少しありますが、皆さん、それにちょっとお付き合ってください。

さて、池禪尼はどういう一族かということです。池禪尼の一族は、一言で言うなら院の近臣層です。院近臣とは何か。まず院というのは、白河上皇や鳥羽上皇を指します。院近臣というのは、レジュメには、「当時の京における政治・経済・文化の中心」と書きましたが、院に、つまり白河上皇とか、鳥羽上皇に、奉仕する中で力をつけていった中・下級貴族と言えます。院政の時代にあつて、政治、経済、文化においても大きな影響力を持った人たちです。もう少し具体的に言えば、【系図1】を見ると、池禪尼のお父さんの（藤原）宗兼は、白河院や、白河院の孫の鳥羽院の妻である待賢門院に近侍していたことが分かります。

そして、宗兼の姉妹の宗子・隆子、つまり池禪尼のオバにあたるとこの二人の姉妹も、待賢門院の女房であり、さらに待賢門院の息子崇徳天皇の乳母^{めと}でした。そして、池禪尼の兄弟にあたる宗長です。ここまで来ると牧の方の父（平）宗親が（宗長の兄弟として）出てきますね。牧の方から見るとオジにあたる宗長は、やはり待賢門院の近侍であるし、池禪尼自身も崇徳天皇の子どもの重仁親王の乳母になっていたことが分かります。つまり、池禪尼から牧の方に目を転じて、牧の方は、院近臣層の家の出ということになります。

平清盛も武士のイメージが強いですが、お父さんである平忠盛も白河院・鳥羽院に仕えた院近臣です。最近というか、少し前からですが、「京武者」と言われています。それより昔の研究だと、「武士は草深い田舎で成長して出てくる」と言われていましたが、そうではなくて、たとえば群馬にいた武士新田氏にしても、もともとは京都に活動の基盤を持って活躍していた貴族であつたことが明らかにされています。

群馬、当時は上野国と言われていましたが、その武士も、本拠となる地方に所領を持ちつつ在京活動をするこ

て活躍することも必要不可欠なことだったとも言え、中・下級の貴族の中で軍事的職能を持つ人たちが、「武士」と言われるようになったにすぎない、と言われていきます。話を戻すと、牧の方の家も、「典型的な院近臣層の家」と言うことができます。

② 北条時政との結婚の意味

牧の方の夫北条時政について見てみると、最近では、「時政も京武者だ」と言われています。では北条時政と牧の方が結婚した意味とは何だったのでしょうか。それを考えていきます。北条時政も京武者で、牧の方は院近臣層の家の出です。その二人の結婚の意味とは何かということです。京武者は、地方に些少な所領さしょうを持って、院や摂関家のような荘園領主に依存する存在でもありました。

牧の方と婚姻関係を持つことによって何が良かったかというと、当時の二人が結婚したと考えられる治承四（一一八〇）年より少し前、北条時政は、京都の基盤がとても脆弱ぜいじやくでした。なので、牧の方との結婚は、京都の基盤を強化することにつながり、貴族社会に依存する京武者時政にとって必要なことだったと言えるのです。

（二）牧の方のネットワーク

① 藤原家成に連なる一族【系図1】

「（二）牧の方のネットワーク」に入っていきます。時政が必要だった牧の方のネットワークをもう少しよく見ていくと、「①藤原家成に連なる一族」であることが分かります。さきほど牧の方が池禪尼とつながる一族だということ述べました。そしてさらに、池禪尼の一族は、藤原家成に連なる一族だったのです。私は今すぐく有名なそ

うに言っていますが、藤原家成はどういう人か皆さんご存知ですか。私は、この家成にとっても注目をしています。皆さんにも今日は家成と言う人をしつかり覚えて帰ってもらえれば本当に嬉しいのです。

家成は、鳥羽院の近臣で、その筆頭とも言われる人物です。彼が何をしたのかというと、まず、鳥羽院が発願した寺院を次々に建立していきました。院近臣層の大きな特徴でもあるのですが、家成はその院の御願寺（しかも複数の寺）の造営を担当しています。その当時、院だけではなく、女院、摂関家も、浄土信仰の高まりを受けて、御願寺を次々と建立しました。

したがって、京都にはこの時期たくさん御願寺が建ちました。今ここ（京都女子大学）は七条です。京都駅の八条よりも南の竹田とか、その西の辺りが「鳥羽殿」と言われていて、そこには天皇家の御願寺が次々に建立されていきます。寺を建てると、その寺院を経済的に支えるための中世荘園が全国各地につくられていきます。御願寺造営の一環として次々と中世荘園が立荘されていくのです。院近臣は造営担当者として寺院を建てますが、さらにその運営・維持のための経済基盤としての荘園も次々と立てていったのです。

レジュメ三ページです。実はこの藤原家成という人物は、寺を建てて、荘園を次々につくることで特に活躍した人物でした。「荘園のオーガナイザー的な存在」と書きましたが、寺院も建てるけど、荘園もつくるという存在で、自分のあらゆるネットワークを駆使して荘園をつくっていきます。荘園をつくるには、非常に多様なコネクションが使われました。【系図1】で家成を確認してください。家成は、池禅尼のイトコです。牧の方からすると、ちょっと離れますが、父親のイトコということになります。

荘園はどのようにつくられていくか。せっかく群馬から来たので、群馬、上野国にある新田荘はどうつくられたかということでお話させていただきます。新田義重を祖とする新田氏の新田荘、南北朝期の有名な新田義貞もこの

新田氏の子孫です。レジュメ三ページの二行目に、「造営者・国司・知行者（領家）・開発請負者」と書いてあります。新田荘では家成が御願寺（金剛心院）造営者、（藤原）重家が国司、（藤原）忠雅が知行者、新田義重が開発請負者の役割を担いました。

お寺の造営者として、先ほどから出ている藤原家成、そして、荘園をつくるにはその国の国司の許可が必要になってきます。このときの上野国の国司が重家です。荘園を管理・運営していく知行者は忠雅です。「開発請負者」とありますが、現地でいろいろな手配・調整するのが開発請負者で、それが新田義重となっています。そして、この人たちは全員、家成のネットワークの中にいることが分かります。造営者・国司・知行者（領家）・開発請負者、全員が彼のコネクションでつながるのです。

国司重家は家成のイトコで、娘婿でもあります。「あやかり預所」とか「領家」と言われる知行者の忠雅は、家成の養子であって、やはり娘婿でもあります。忠雅と新田義重も姻戚関係を結んでいます。頼朝が蜂起したという情報をいちはやく忠雅に伝えたのが新田義重でもあります。彼らは非常に関わりが深く、かつ全て家成のネットワークの中であることが分かるでしょう。家成は、荘園をつくるのにあらゆるコネクションを利用していたのです。

やっと絵が出てきました。これは『朝日百科日本の歴史65』からですが、鳥羽殿はこんな感じだっただろうという想像図です。皆さん、スライドを見てください。文字ばかり見ていましたが、しばらく画像が出てきます。ここが安楽寿院です。竹田駅からちょっと歩いた所に、今もあります。そしてここはまさに新田荘がこの寺のために立荘された金剛心院ですが、この金剛心院跡は、高速道路の下にあって、今行くと怪しげな所です。桂川と鴨川の間にあったのが鳥羽殿で、南側に巨椋池です。

安楽寿院に付属する荘園群を見ると、荘園の知行者はほとんどみんな家成の関係者です。先ほど見た金剛心院に

も付属するたぐさんの莊園がつくられて、その知行者も姻戚関係などでやはり家成と深い関係があります。

じっくり確認する時間はありませんが、寺が幾つか建てられて、その造営を担うとともに、たぐさんの莊園をつくって、その莊園は家成のコネクションの中でできていきました。

皆さん、このスライドの写真はどこか分かりますか。書いてありますね。新田莊はこんな感じですよ。これだと、「ああ、良い景色だね」となってしまいかもしませんが、この横断して流れる川は何川に分かりますか。「坂東太郎」と呼ばれる利根川です。利根川の北側に赤城山があって、大間々扇状地の東側が新田莊になっています。

②牧の方のネットワーク

文字のほうに戻り、「②牧の方のネットワーク」に行きます。私にとっても、家成のネットワークは想像以上でした。そしてさらに、牧の方は、家成に連なる一族だったわけです。牧の方自身も、そのネットワークを受け継ぎながら、それをさらに広げていきます。それを見ていきましょう。牧の方の娘たちについて見ます。

牧の方には四人ないし五人の娘がいたと言われていますが、確実な娘は四人で、【系図2】の中で太字にしている「嫡女」、「二女」、「三女」、「四女」です。これは時政の娘全体ではなくて、牧の方所生の娘のみを数えています。

この人たちをよくよく見ていくと、【系図2】の「嫡女」、つまり、長女ですが、彼女は、最初に平賀朝雅と結婚しますが、牧の方事件で朝雅が死んでしまうと、藤原国通と言う京都の貴族と結婚します。国通のおじいさん成通は、八条院のお母さん美福門院の皇后大夫だったことが分かります。また「三女」も非常に面白い人物で、宇都宮頼綱と結婚して一緒に京都に移住しますが、その後別れて、五十歳手前ぐらいで摂関家の息子の松殿師家と結婚し、「私、この人と結婚したの」と元夫に言うような人です。

[illegible]

③安貞元年（一二二七年）時政十三回忌と御堂建立

100

が亡くなり、義時や政子も亡くなったあと、京都で時政の十三回忌を開催しています。さらに、そのために御堂を建立しています。法要の開催とか、お堂の建立ができるということは、牧の方が晩年に至っても経済的に豊かだったことを示しています。

先ほど、「中世荘園がたくさんできた」という話をして、新田荘で忠雅と言う人を出しましたが、私は牧の方自身もどこかの荘園の知行者的な立場にあった可能性があるのではないかと、思っています。

荘園の知行者は、「領家」とか「預所」ともいい、荘園を管理・運営する人のことです。ところでこの「荘園知行者に女性はおかしくない？」と思う人がいるかもしれません。実は決して珍しいことではありませんでした。鳥羽院の御願寺である安楽寿院の荘園群で調査すると、約三割が女性の知行者であることが分かります。むしろ、荘園の知行者ということではジェンダー差はほばないとも言えるでしょう。

また、どちらかというと女性のほうが官職の縛りがないので、女房仕えを通じてコネクションを築きやすかったとも言えるし、牧の方のようなコネクションやネットワークを再構築していくサイクルは、荘園を運営し、さらにはその荘園を経済基盤とする御願寺を維持していくのに必要不可欠だったと、私は捉えています。

牧の方のネットワークは本当に想像以上ですし、牧の方の、在り方は、今後もっと調査研究しなければいけないと思います。たとえば関東御家人に比企氏と小山氏がいますが、比企尼とか寒河尼も、京に基盤を持つことが明らかになっているため牧の方と同じような存在だったのかなとも考えられます。「牧の方が荘園知行者だった可能性がある」と言いましたが、それは今は確証がないので、今後、状況証拠を積み重ねていくほかありません。可能性として提示しておきます。

(三) 牧の方事件（牧氏の変など）——政治的関わりと矛盾——

牧の方についてのもう一つのトピックです。莊園の話はややこしかったかもしれませんが、牧の方事件の話に入っていきます。「牧氏の変など」と書いてありますが、「牧の方事件」と言っているのかなという迷いが少しあります。理由は追って話します。今から概要を話していきますが、一般的には、「牧氏の変」、「牧の方事件」などいろいろ言い方があります。この講座では、「牧の方事件」で統一しておきます。

①概要（元久元年（一二〇四年）から元久二年（一二〇五年））

まず概要を押さえていきます。前提として畠山重忠事件（畠山重忠の乱）があります。比企氏の乱のあとです。畠山重忠事件の前提として、曾我部さんの話の中で先ほども出てきましたが、三代將軍実朝の妻として、坊門信清の娘を若い御家人たちがお迎えに上洛します。

上洛したときの宴会で、時政の娘婿平賀朝雅と畠山重忠の息子重保が口論になります。その直後のタイミングで、牧の方の最愛の息子北条政範が急死してしまいます。

『吾妻鏡』元久元年十一月十三日条です。【去る五日、（北条政範が）京都において卒去するのよし】とあって、（政範は）牧の御方の腹の愛子なり、御台所お迎えのために去月上洛」とありますが、皆さんに配ったレジュメの最後の七ページには、現代語訳（『現代語訳吾妻鏡』吉川弘文館より）も付けています。

この条をもう少し詳しく見ていきましょう。「辛未。遠江左馬助（北条政範）が去る五日に京都で死去したとの飛脚が（鎌倉に）到着した。【系図2】」にも、「政範」が見えると思います。「政範は、遠州（北条時政）が今寵愛している牧御方との間に設けた最愛の子である。御台所（実朝室）のお迎えのために先月上洛し、去る三日に京都

に到着した。道中から病気で、とうとう死去した。父母の悲嘆はとても比べようがないほどという」とあります。

政範が京都で死んでしまうわけです。そのショックもあり、自分の娘婿朝雅と畠山とのけんかもあって、「じゃあ、畠山を追討しよう」ということになってしまっています。北条時政と牧の方による畠山重忠追討です。

このとき、(北条)義時・時房兄弟は、私怨に満ちた畠山追討に最初は強く反対しました。時政は、息子たちに説得されます。それが、『吾妻鏡』元久二年六月二十一日条です。これも現代語訳を見ていきます。「二十一日、丁未。晴れ。牧の御方は、(平賀)朝雅(去年畠山六郎(重保)に悪口を受けた)の讒言ざんげんを受けてご立腹であったので、(畠山)重忠父子を誅殺しようとい内に謀議があった。まず、遠州(北条時政)が、このことを相州(北条義時)と式部丞時房らに仰った。二人は申した。重忠は、治承四年以来ひたすら忠節を尽くしてきたので、右大將軍(源頼朝)は、その志に鑑みられて、(頼朝の)子孫を守るよう心を込めた御言葉を残されたものです。とりわけ、金吾將軍(源頼家)に仕えていながら、(比企)能員との合戦のときは味方にまいる忠節を尽くしました。これは全て父子の礼を重んじたためです」。重忠も、時政の娘を妻としていました。

「そうしたところ、今のような憤りがあって、反逆を企てるでしょうか。もし度重なる勲功を心に留めず軽率に誅殺すれば、きつと後悔するでしょう。罪を犯したか否か審議をただしたあとに処置したとしても遅くないでしょう」と息子たちに言われます。「時政は再び言葉を発することなく席を立たれ、義時もまた退出された」。つまり、畠山重忠の討伐はしないということになりました。

ところが、「備前守(大岡)時親(牧の方の兄弟)が牧御方の使者として、追って義時の邸宅にまいり、申した。『重忠の謀反のことは既に露顕しています。そこで、君のため、世のために事情を密かに時政に伝えました。今、あなたが申されたことは、ただ、重忠に代わり、その悪事を許そうとするものです。これは継母を憎んで、私を讒

言人とされようとしているのでしょうか。』義時は、『このうえはお考えに従います。』と申されたという。このように牧の方がさらに説得し返すわけです。「やはり重忠を倒すべきだ」ということで、それに屈して義時たちも重忠を討伐することになります。

畠山重忠は、この間の大河ドラマでも非常にすてきな人に描かれていて、「畠山重忠ロス」とも言われていたが、実際の重忠も、御家人からとても人望がありました。したがって、時政・牧の方への御家人たちの不信感がピークに達していきます。今、ここでの構図は、時政・牧の方夫妻VS対義時・時房兄弟、政子も入れると、その息子・娘たちとの対立構造です。

討伐後、御家人たちの不信感を挽回しようとした時政と牧の方は、『吾妻鏡』には「牧の方の奸謀かんぼう」と出てくるのですが、実朝を殺して娘婿の平賀朝雅を將軍にする計画を立てます。しかし、それに先んじて政子を実朝を迎えて、義時邸に避難させ、御家人たちも全て義時に従っていきます。時政は、それを見て出家し、翌日には北条へ下向しました。このとき、恐らく牧の方も一緒に下向しただろうと言われています。

これは『吾妻鏡』元久二年閏七月十九日条に、『牧の御方奸謀を廻らし、朝雅をもつて関東將軍となし、当の將軍家を謀り奉るべし』と出てきます。

②牧の方の晩年と牧の方所生の娘たち【系図2】

「②牧の方の晩年と牧の方の所生の娘たち」を見ていきます。【系図2】を適宜見てください。鎌倉幕府の最重要情報、例えば政子の危篤などですが、この政子の危篤を受けて泰時が「出家する」と言いだします。これらの情報は京都の貴族藤原定家の知るところとなって、藤原定家の日記、『明月記』に書かれます。定家が知るといことは、

京都政權に政子の危篤の情報が伝わることを意味するでしょう。

しかも、『他方音信未通』（『明月記』嘉祿元年七月十九日条）とあって、「ほかの人はまだ知らないのではないか」と定家は記しています。つまり、定家は鎌倉幕府の最重要情報をいち早く知る立場にありました。それはなぜか。定家は息子の為家からそれを聞きます。為家は自分の妻（牧の方三女の娘）から、妻は自分のお母さん（牧の方三女）から、そしてそのお母さんは誰から聞くかというと、さらにそのお母さんである牧の方しか情報源はないはずです。したがって、牧の方は、当時も鎌倉幕府内の最重要情報を知り得る立場にあったと考えられます。

レジュメ五ページに行きます。さらにもう一つ言っておくと、牧の方の娘たちが異母姉の北条政子の危篤に際して、お見舞いのために京都からわざわざ下向しています。そして、政子が死んでしまうと、牧の方の娘たち（嫡女と三女）や孫娘（三女の娘）も関東に下向しています。つまり、牧の方やその娘たちと政子の関係は良好だったと言えるのです。

③「①」と「②」の事実矛盾を解決する説とは……

ここまで見てきて、「うん？」と思うことはないでしょうか。ちょっと矛盾だなと思いませんか。つまり、①では政子・義時と牧の方は対立構造にあったのに、②では良好な関係を築いています。これはどういうことなのでしょう。この矛盾を解決するための一つの説があります。

比企の乱（一二〇三年）後、空白地帯となっていた武蔵国の掌握を北条氏が狙います。北条氏が相模と武蔵を押さえようということです。しかし、武蔵国では、畠山重忠が武蔵国留守所惣検校という役職を持っており、武蔵国を狙う北条氏にとって畠山氏の存在は障害でした。そこで、畠山重忠追討事件が引き起こされてしまいます。北条

氏にとっては、武蔵国を掌握するために畠山をつぶすことは必要だったわけですが、御家人から人望のあった畠山を討伐すると御家人らの反発を招いてしまうことは明らかでした。

このような中で武蔵国を掌握しつつ、御家人たちの反発を抑えるためにはどうしたらよいか、と考えたときに、無理な政權掌握策（牧の方事件）をわざと企画して、それを北条義時らが治めることにより、北条同士（北条氏と北条氏）の争いにして御家人の反発を抑える。つまり時政・牧の方にあえて乱を起こさせて、二人には身を引いてもらったと考える野口実先生の説に乗りたいと思います。

牧の方事件そのものが北条氏の自作自演で、時政・牧の方に政治の表舞台から身を引いてもらったと考えるならば、その後も牧の方と腹違いの兄弟・姉妹たちの仲が良好なのも納得できると思うのです。

④牧の方は「悪女」か

最後に悪女問題に片を付けておきます。牧の方は悪女なのかということですが、『吾妻鏡』の【奸謀を廻らし】という書きっぷりは、牧の方に全ての責任を押し付けるものです。老耄ろうもうの時政がそれに乗せられてしまったという構図が見られます。しかし見てきたように、この事件は牧の方一人が起こしたとも考えにくい。したがって先述のように「牧の方事件」と称するのには、迷いがあつたわけです。

ここでもう一度考えてみたいのは、『吾妻鏡』は誰によるものかということ。『吾妻鏡』は、鎌倉中期の北条政権によって作られた歴史書です。ということは、『吾妻鏡』は、北条政権の初代である時政、そして、二代目義時を悪く書くことはできません。

ところで、「悪女」という言葉の辞書的な意味は知っていますか。「悪女」の語義は、最初は「容貌の醜い女」と

いう意味でしたが、のちのち、中世ぐらいから、「男をたぶらかして、権力や財力を手に入れた女性」という意味にもなっていくます。これはあくまでも男性側から見た価値基準による女の尺度と言うこともできます。つまり、男側から見たときの女の見え方です。「牧の方」Ⅱ「悪女」というのは、『吾妻鏡』の編さん者によるものと言えるかもしれません。実際には牧の方だけが悪いわけではないとも思います。牧の方の実像は、『吾妻鏡』だけを見ても分からないということです。

牧の方は強い人だなという感じはしますが、実像がどうだったかということは、今後、『吾妻鏡』以外の史料や状況証拠からも精査していく必要があります。想像力をたくましくして、いろいろな想定をしていくことが大事だと、私は思っています。

おわりに

○牧の方は首謀者？共犯者？自作自演？

「おわりに」に入っていきます。牧の方は、「牧の方事件」の首謀者なのか。『吾妻鏡』では首謀者となっていますが、本当は時政や義時が首謀者で、共犯者だとか、自作自演だとか、いろいろな説があります。ただ、どちらにしても、『吾妻鏡』に、「牧の方が奸謀を廻らす」とここまで堂々と載っていることは、そのように書いても、この時代において全く違和感がなかったことだったとも言えるでしょう。つまり、牧の方は首謀者であつてもいい人、そういう女がいても全然おかしくはなかったということが、むしろ大事だろうと思います。

最初に、「この時代の女性たちは、私にとっても勇気をくれる存在」と言いました。牧の方の現在のイメージは、

悪女とか継母です。「悪女」を「強い女」と言い換えてみましたが、「強い女」とか「継母」というとどんなイメージを持ちますか。「皆さんの中に、強い女」や『継母』にそもそもちょっとネガティブなイメージがありませんか」と聞いておいて、最後に『吾妻鏡』で牧の方と政子の関係を記した亀の前事件という有名なエピソードを捉え直したいと思います。

○「牧の方と政子の関係」Ⅱ「亀の前事件」

亀の前事件は大河でも描かれていましたが、亀の前と言う女性と頼朝が浮気をしていることを、頼朝の妻政子に伝えたのは継母牧の方です。『吾妻鏡』寿永元年（一一八二年）十一月十日条に、【これ北条殿の室家牧の御方密々これを申せしめたまう故なり】とあって、政子が浮気を知ることになります。「後妻打ち（前妻が後妻の家などを打ち壊してよいという慣習、政子は前妻ではないので、厳密には後妻打ちではないとも。）」とも言われていますが、亀の前の家は壊されて大変なことになります。さて、皆さんは、この事件をどう捉えますか。

「意地悪な継母が継娘に告げ口をした」と捉える方も多いかもしれませんが、ですが、そうではなくて、「このような継母・娘関係は、むしろ当時の女性同士が連帯して構築する情報ネットワークの在り方なのだ」と、野村育世さんが言っています。母娘だけではなく、例えば、下女と女主人のような関係においても情報ネットワークがあったと言われています。継母というと、千年以上も前から世界中で悪い女として語られています。が、「ずっとそう刷り込まれているだけなのではありませんか」ということです。

このように考えてみると、大河ドラマでは継母・娘が割と良好な仲で描かれていたので、「大河ドラマは新しい物語」とも言えると思いました。悪女、継母、強い女という先行イメージに囚われない見方を今後していきたい

と思っています。

○「政治家北条政子が先例にしたもの」Ⅱ「女院と、牧の方の生き方」かも

レジュメにも、「政治家北条政子が先例にしたもの」Ⅱ『女院と、牧の方の生き方』かも」と書きましたが、將軍とも言われた北条政子が何を手本として政治的手腕を発揮したのか、ということを考えて本当に終わりにしたいと思います。実質的に初めて女性として將軍となった政子には、見本とすべき女性権力者が少なくとも武家にはいません。今日見てきた発給文書から考えてみるならば、それは、牧の方と牧の方のネットワークを前提とした院近臣層經由の「女院の情報」なのかもしれないと思います。つまり、牧の方の力強い生き方、その前提となる牧の方のネットワーク、その中にあった院近臣層の中の八条院発給文書の情報です。そこで八条院とつながってくると、私としては非常に面白いです。それを思い付いたのは昨日だったのでレジュメに反映できませんでした^が、そのように考えられると、私は今後も楽しく研究できそうです。それはそうと、今日見てきた、牧の方や北条政子の自分で人生を切り拓いてゆく生き方は、非常に頼もしく、私に勇気をくれるわけです。最後に「参考文献」を出してきます。ご清聴どうもありがとうございました。

(終了)

《参考文献》

落合義明「北条時政と牧の方」(野口実編『治承―文治の内乱と鎌倉幕府の成立』清文堂、二〇一四年)

佐伯智宏「池禅尼―頼朝の命を救った清盛の義母―」(服藤早苗編『平家物語』の時代を生きた女性たち』小径社、二〇一三年)

佐藤恒雄『藤原為家研究』、笠間書院、二〇〇八年

杉橋隆夫「牧の方の出身と政治的位置―池禪尼と頼朝と―」(『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、一九九四年)

田中貴子『〈悪女〉論』紀伊國屋出版、一九九二年

田辺旬「北条政子発給文書に関する一考察―「和字御文」をめぐって―」(『ヒストリア』二七三、二〇一九年)

田辺旬「北条政子―「尼將軍」の実像―」(後掲田辺・野口編著二〇二三年)

田辺旬・野口華世編著『鎌倉北条氏の女性ネットワーク』小径社、二〇二三年

谷昇「北条政子危急をめぐる朝幕の対応とその背景」(『立命館文学』六七四、二〇〇一年)

野口実『北条時政』ミネルヴァ書房、二〇二二年

野村育世『北条政子―尼將軍の時代』吉川弘文館、二〇〇〇年

樋口州男・田辺旬・錦昭江・野口華世編著『吾妻鏡』でたどる北条義時の生涯』小径社、二〇二一年

山本みなみ「北条時政とその娘たち―牧の方の再評価―」(『鎌倉』一一五、二〇一三年)

野口華世「中世前期の王家と安楽寿院―「女院領」と女院の本質―」(『ヒストリア』一九八、二〇〇六年)

野口華世「中世天皇家からみる新田荘の成立」(『群馬文化』三三四、二〇一八年)

野口華世「牧の方―院近臣層のネットワーク―」・「宇都宮頼綱の妻―京都で活躍した政子の妹―」(前掲田辺・野口編著二〇二三年)

〈キーワード〉

北条政子 牧の方 八条院 藤原家成 女性権力者 院近臣